

# 「死者」と「生者」のはざま

— James Joyce の “The Sisters” (*Dubliners*) における曖昧な語り —

梅 津 義 宣

Between the Dead and the Living

— Ambiguous Narrative in James Joyce’s “The Sisters” (*Dubliners*) —

Yoshinobu Umetsu

## Abstract

“The Sisters,” the first story of James Joyce’s *Dubliners*, is clearly about ambiguity and the impossibility of reaching certainty. Researchers encounter several barriers to understanding the essence of the story: the text is full of elliptical language filtered through the consciousness of a bewildered boy-narrator who broods over the deceased priest and the meaning of their friendship. “Paralysis,” “gnomon,” and “simony” are the heavily weighed key words whose relevance extends well beyond the story. These key words are eventually revealed not as riddles, but as indeterminate symbols that haunt the textual unconsciousness of the narrative. The aim of this paper is to look into the ambiguous narrative between the dead and the living in this story, especially the verbal puzzles initially announced by these key words.

## Key Words

ambiguity, gnomon, narrative, paralysis, simony, universality

## I. はじめに — 短篇 “The Sisters” の成り立ちと文学的特異性 —

James Joyce (1882-1941) の散文における試技的作品とも言うべき短編集 *Dubliners* (1914年6月 Grant Richards社より出版) に収められた15編の物語は、大部分、1903年から1906年までの間に書かれていたものと推測できる。多くの研究者や批評家の解説・分析・評価を待つまでもなく、*Dubliners* の諸短篇の文体は、いずれも、ほとんど完璧に近い精緻な領域に達しており、その均整の取れた文や行に、「周到な下品さ (scrupulous meanness)」を作為的に織り込み、深い精神的な霊妙さと高質の文学的特異性を湛えているとすることができる。

15編の短篇を含む *Dubliners* の中で、作者 Joyce は、「自分自身の少年時代を反映する物語」として、本短編集の初めの3編にとりわけ深い関心を示している<sup>1</sup>。中でも、本短編集の冒頭に置かれる “The Sisters” は、1904年8月13日初版の *Irish Homestead* に投稿以来、幾多の推敲と改訂を重ねている。

“The Sisters” の物語は、「少年時代」を一人称で語る冒頭の3編 (“The Sisters”, “Araby”, “Eveline”) の中でも、特に多義的で複雑な性格を有している。作品の題名は “The Sisters”

であるが、物語の主要な部分は〈姉妹たち〉について述べられているわけではない。物語の中心人物は、作品の最初から最後まで話題の核心となる亡きFlynn神父である。神父の死と生き様は作品の中でさまざまな形で語られることになる。一人称の「語り手」の少年、Cotter老人、少年の伯父・伯母、神父の姉妹たち（NannieとEliza）の錯綜する視線とそれに基づく曖昧な語りが交錯し、Joyceの文学的世界が構築されてゆくのである。

「語り手」の少年は孤児である。伯父・伯母の家において疎外された孤独な生活を続けている。少年に与えられた微かな救いと言えば、生前Flynn神父から暗示的に示された慰めと励ましであった。読者・研究者は、「語り手」の少年が目撃するもの、聞くもの、直感的に肌で感じるものとおして、順次、委細な情報を得てゆくことになる。

本短篇のモチーフは、「少年の目覚め」とも言えるだろう。「目覚め」の背景には、「（死への）厳かな畏れ」「精神的錯乱」「単純な恐怖心」などが混然として潜在していることも見逃すことができない。少年をはじめ、この作品に登場する人物が「囁く」「語る」言葉や相互の対話そのものに「麻痺」「虚無感」「無気力」「無価値」などといったダブリンに満ち溢れているネガティブな（相互連鎖的）諸概念が象徴的に凝縮されている。

ダブリンに見られるこの「精神的麻痺状態」は、この小都市だけに限られたものではなく、「人間が存在する全ての場所に〈普遍的に〉存在する」ことを語ることが作者Joyceの狙いであることを心に留めたいと思う。

本論文の主要な目的は、「死者」と「生者」のはざまで交わされる「曖昧な語り」について考察することにある。「耳で聞かれる語り」と「聞かれない語り」が混交しながら構築されるJoyce特有の文学世界について、本短篇集の基盤的モチーフである「精神的麻痺状態」を研究の核に据えながら、単に文体論・作家論・神学論などに偏ることなく、複合的・相関的観点から総合的な文学研究にしたいと思う。

## II. 本短篇 “The Sisters” の主題のもつ曖昧性

推敲と改訂を重ねられ、1914年に*Dubliners*の冒頭に収められる前の物語（*The Irish Homestead*, ed., 1904）の冒頭の文の中に、すでに（意図的とも思われる）「曖昧性」「不明瞭性」が明確に設定されていることに注目したいと思う。

- (1) Three nights in succession I had found myself in Great Britain Street at that hour, as if by province. Three nights I had raised my eyes to that lighted square of window and speculated ..... Each night the square was lighted in the same way, faintly and evenly. It was not light of candles so far as I could see. Therefore it had not occurred yet.<sup>2</sup>

「最終版（1914年）」では、この「不明瞭」さが一層強調される。物語は暗闇の中で、窓を注意深く見上げる（「語り手」の）少年の姿が描き出される。先ず「今度こそ彼（Flynn神父）は駄目だろう。何せこれで三度目の脳卒中の発作だから…」という少年の思いに言及する物語冒頭部分は、改訂版では次のように書き始められる。

- (2) There was no hope for him this time: it was the third stroke. Night after night I had passed the

house (it was vacation time) and studied the lighted square of window: and night after night I had found it lighted in the same way, faintly and evenly. If he was dead, I thought, I would see the reflection of candles must be set at the head of a corpse. He had often said to me: 'I am not long for this world.' and I had thought his words idle. Now I know they were true. Every night as I gazed up at the window I said softly to myself the word paralysis. It had always sounded strangely in my ears, like the word gnomon in the Euclid and the word simony in the Catechism. But now it sounded to me like the name of some maleficent and sinful being. It filled me with fear, and yet I longed to be nearer to it and to look upon its deadly work. (下線筆者) (p. 9)

「三度目の発作（脳卒中）」という明瞭な言葉は彼（Flynn 神父）の身体的な状態が絶望的な病状に陥っている様を表現している。親しい神父の生涯は刻々と終焉に近づいている。その表現の直後に「ちょうど休暇中だったので」と少年の思いが記述されるが、少年にとって「休暇」は〈学校が休みのとき〉のほかに、〈活動しないとき〉を、ひいては〈体制からの解放のモチーフ〉を象徴的に暗示しているとも読み取ることができる。Flynn 神父が病床に臥す家の「明かりのついた四角の窓を注意深く」見ると、淡い光が漂い、また、一様に明るくなっており、神父の身体の生命が徐々に「死」を迎えようとしていることが読み取れる。やがて灯されるはずの二本の蠟燭はまぎれもなく近々行われる通夜を暗示している。それはまた〈かけがいのない存在〉の「生」に「終止符」が打たれることへの峻厳な予告でもある。「生」と「死」、「存在」と「不在（非存在）」、「光」と「影」など…これら対極する概念全てが相互に交錯し絡み合っており、この物語の多様性や曖昧性、そして読み解く困難さを読者・研究者に印象付けている。

さて、ここで、この冒頭部分 (p. 9) の文章の時制 [tense] が、ほとんど規則正しく past tense と past perfect tense とが交互に用いられていることに注目したい。

“...it was the third stroke.” → “I had passed the house ...” → “...and (I) studied the lighted square of window.” → “...for I know that two candles must be set ...” → “He had often said to me ...” → “...I said softly to myself the word paralysis.” → “It had always sounded strangely in my ears ...” → “But now it sounded to me like the name of ...”

多少の規則性の欠落は見受けられるものの、ここに、ほぼ正確な正則性を持った時制 [tense] の反復的交差を見出すことができる。《過去におこった出来事》と《「語り手」としての少年の追憶》とが相互に交錯して（一見たどたどしくはあるが）極めて自然な様式で、次第に意味のある形式とまとまりある文体とが織りなされてゆく。ここに作者 Joyce の周到な「追憶の文学」の構築に欠くことのできない巧緻な技法（文体的・修辭法的）を見出すことができる。

引用文(2)、すなわち改訂版の第1節の終わりに“paralysis”、“gnomon”、“simony”という不思議な響きを持つ3語が加えられる。これらの言語は、とりわけ相互に論理的な関連性をもつものとは考えられないが、少なくとも「語り手」である少年の潜在的な意識の中で、これらの語のそれぞれの意味と少年自身の周辺にある現実の出来事との関わりを垣間見させる役割を担っていると言えるだろう。そのような観点からすれば、これらの3語は、確かにこの物語（“The Sisters”）のキーワードとなっている。親しかった神父に「死」がもたらされることは、

ほぼ間違いのないことであるが、神父の「死」を悲しむ〈現在生きている人々〉、そして〈少年自身〉の内面がダブリンの人々の“paralysis”（「精神的麻痺」）と重なり合っている。また、“paralysis”は、明らかに、中風によってもたらされる“dementia”（「痴呆」）のイメージと混じり合っている。

毎晩、窓を見上げながら、少年が小さな声で“paralysis”という言葉こそと自分に呟いてみると〈怖くてたまらなくなる〉。しかし一方では、近寄って、その忌まわしい魔力（deadly work）を確認したいという気持ちにもなる。第2の不思議な響きを持つ“gnomon”は幾何学で用いる言葉で「平行四辺形において、その相似形を一角から切り取った残りの部分」<sup>3</sup>のことを言う。また、“gnomon”には「日時計の指時計」の意味もあり、すなわち円の一部を影にして時刻を告げるものである<sup>4</sup>。Joyceは、これら両方の意味を考慮のうえ、「切り取った残りの部分」と「影になった部分」の重要さを示唆していると言えるだろう。また、この「欠けた月」は、この時代のダブリンの（精神的・身体的）麻痺の状況を象徴的に表すと同時に、神父に対する尊敬の念の〈喪失〉を象徴すると考えることもできる。さらに、Mary T. Reynoldsによれば、“gnomon”は明らかに〈不在〉〈非存在〉〈欠如〉を表す比喩的・象徴的表現であり、本物語を読み解く鍵ともなる言葉である<sup>5</sup>。また一方では、神父自身が自らの務めを積極的に行おうとする意志を失ってしまったことを象徴する言葉と読み取ることもできる。

さらに、“simony”という言葉は、本来「聖職売買」の意味で、新約聖書（Acts 8:18～24）に記述されるSimon Magusの故事から来ている。神父と少年の特別な関わりを仄めかすとと思われる言葉とも思われるが、透徹した理解への手掛かりを掴むにはまだ余程の距離がある。いずれにしても、これらの難解な言葉を含む短い記述の中に、少年の内的世界に存在する一種の葛藤や謎を解き明かすことの困難な状況と曖昧性とが暗示的に設定されている。まさにこのような「曖昧性」こそ、この物語の主要な主題である。

### Ⅲ. Flynn神父とダブリンの大人たち

第2パラグラフでは、主として、ダブリンの大人たちの「語り」をとおして、Flynn神父にまつわる周辺の事情が提供される。

少年が夕食時に階下へ降りてみると、Cotter老人（少年の伯父の友人）が暖炉の火の側に腰を下ろし、パイプを吹かしながら、少年の伯父と伯母を相手ににやらかし話している。この状況は、両親のいない孤独な環境の中にある少年の《疎外感》《寂寥感》を伝えるものである。大人たちの会話の話題も初めは隠蔽され、曖昧で不明瞭である。

先ずCotter老人の次のような言葉が少年の耳にはいつてくる。

- (3) 'No, I wouldn't say he was exactly ... but there was something queer ... there was something uncanny about him.' Ill tell you my opinion ...' (下線筆者) (p. 9)

少年の耳に入ってきたCotter老人の言葉には、〈話題の主〉である〈彼〉（Flynn神父のことらしい）に対する否定的な反応が感じ取れる。それは異常（異様）な人間存在に対する《不快感》や《軽蔑に満ちた感情》が籠められている。このような感情の根底には、明らかにある種

の障害をもった人間に対する《偏見》と《差別の意識》が存在する。Cotter老人が下す〈彼〉への侮蔑的な評価の言葉 ‘Tiresome old fool!’ (p. 10) は、このことの証左である。

伯父は少年の姿を見て「おまえの仲良しだったFlynn神父が亡くなった」ことを告げる。さらに続けて、Flynn神父が少年に「いろいろなことを教えた」こと、そして少年の将来に「望み」を託してくれていたことを話す。伯父はこのことをCotter老人にも説明するのだが、老人の対応は不確実なもので、しかもどこか捻くれた感じすら与える。老人は少年をく子ども扱いしていることは明瞭である。少年が神父の亡骸に対面することについてのCotter老人の対応も漠然として不明瞭である。

この時のCotter老人の話す曖昧な「語り」は実に象徴的である。

- (4) ‘It’s bad for children,’ said old Cotter, ‘because their minds are so impressionable. When children see things like that, you know, it has an effect….’ (p. 11)

Cotter老人は「子どもは〈敏感〉である」と言いながら、既に自分自身が子どもを傷つけていることには、ほとんど気づいていない。この一連のパラグラフの中で、他者に向かって、頑なに ‘I’ll tell you my opinion…’ (p. 9) とか ‘I have my own theory about it.’ (p. 10) というような独断的な言語表現によってしか自己存在証明が得られないCotter老人の姿には名状しがたい寂寥感・孤独感が溢れている。少年は、Flynn神父の「中風」「痴呆」の症状を見詰めながら、ほとんど本能的な感覚で“paralysis”の本性を感じ取っている。それに反して、ダブリンの大人たちは、「自分は（全てを）知っている」と自惚れ、《意味の神髄》を問い正してみようともしない。

#### Ⅳ. 少年とFlynn神父

第2パラグラフで、少年が部屋の暗闇の中で、亡きFlynn神父のことを心に描く場面が描かれる。少年にとっては親しい友だちでもあった神父は逝ってしまった。少年はCotter老人に〈子ども扱い〉されたことに腹をたてながらも、老人の語った曖昧な表現の奥の意味を引き出そうと頭をひねる。「想像 (imagination)」と「夢想 (dream)」が連続して交錯するかのようになり少年の内的世界が描き出される。〔Eric Bulsonは、このような心的状況を“dream sequence”と説明する<sup>6)</sup>〕

- (5) In the dark of my room I imagined that I saw again the heavy grey face of the paralytic. I drew the blankets over my head and tried to think of Christmas. But the grey face still followed me. It murmured; and I understood that it desired to confess something. I felt my soul receding into some pleasant and vicious region; and there again I found it waiting for me. It began to confess to me in a murmuring voice and I wondered why it smiled continually and why the lips were so moist with spittle. But then I remembered that it had died of paralysis and I felt that I too was smiling feebly as if to absolve the simoniac of his sin. (下線筆者) (pp. 11-12)

神父の「中風に冒された、生気のない、灰色の顔」が脳裡に浮かんでくる。少年は頭から毛布

をかぶり、《クリスマス》のことだけを考えようとする。死への恐怖心を、現実感を持った玩具や飾り付けや喜びに満ちた人々の集いに転換しようとする。象徴的な解釈をすれば、「死者」になった「神の代理人」を《生きているキリスト》に置き換えようとしている。Joyceは、しばしば、《クリスマス》と「死」を並列的に配置し、「生」と「死」を生命の両面（表裏）として描き出している。《クリスマス》を《永遠の生命の根源である主イエス・キリストの降誕》と読み解けば、「死」の究極の象徴としてのクリスマス理解が成り立つように考えられる<sup>7</sup>。

夢想の中で、(神父の)灰色の顔がなおも憑いてくる。それは何かを眩き、何かを告白(懺悔)したがつている(と少年には感じられる)。さらに夢想の中の神父は、微笑を浮かべ、少年に向かって告白をしたい素振りを見せる。本来ならば、聖職者(聴罪者)が世俗の罪人の告白を聴くのである。この夢想の場面では、逆に、神父が少年に告白したがつている。これは《聖なる者》と《世俗の者》の明らかな逆転である。言い換えれば、これは一つの倒錯的行為であり、まさに《聖職売買》にも相当する宗教的罪過(“the simoniac of his sin”)でもある。しかし、「神父が“paralysis”で死んだ」という事実によって、このようなおぞましい罪悪的行為が許されると言う不明瞭な暗示と余韻を漂わせながらパラグラフは終結する。ここでは、透明な文学的理解の領域に到達しようとする読者・研究者の前に立ちほだかる《曖昧性という障壁》が在ることを感じさせられる。

Flynn神父が亡くなった翌日、朝食をすませてから、少年はグレート・ブリテン通りの小さな家を見に行く。それは《布地類》という漠然とした名前で登録されている控え目な佇まいの店であって、ふだんは窓に《傘張り替え》と書かれた札が掛けられている。今はシャッターが閉められ、その札も見えない。ドアのノッカーには黒絹の花束がリボンで結びつけられている。黒絹にピンで留められたカードには「1895年7月1日 James Flynn 神父(ミューズ通り聖カタリナ教会前神父) 享年65歳 安らかに憩われますように」と書いてある。少年はこのカードを読み、神父は本当に死んだのだと納得する。少年はこの家の中に入って神父(の亡骸)を見たいと思う。

(6) I wished to go in and look at him (Father Flynn) but I had not the courage to knock. I walked away slowly along the sunny side of the street, reading all the theatrical advertisements in the shop-windows as I went. (下線筆者) (p. 13)

‘slowly’、‘sunny’、‘side’、‘street’ と明瞭な【s】音の反復(alliteration)が調子よく響き、爽快に文章が流れている。これは明らかに少年の心が老Flynn神父から解放されて陽気に弾んでいることを示唆している。私たち人間の普通概念では、「死」は「生の否定」の範疇に在り、当然「死」と「生」は対局する次元に在る。すべての価値(目標・望みの前提)は「生」に在ることは(漠然とした面があるものの)明快な事実である。したがって、人はほとんど「死」に抵抗して生きる。いつの世も、人は唯一の普遍的な価値が「生命」そのものに在ることを信じ続け、「生」そのものを全うしようと務める。

ところで、神父の死をとおして少年が感じた<爽やかさ><自由な気分><解放感>といった感情や感覚はどこから湧き上がってくるものなのだろうか。生前Flynn神父と両親のいない「語り手」の少年の関わりについて考えてみたい。理由は明白にされていないが、少年は伯父と伯母の庇護を受けて暮らしている。神父は、少年にとっては《慈父》のような親しみを感じ

ずることのできる〈かけがえの無い存在〉であった。それは、周囲の人びとの「語り」からも明白である。神父は、若い時分、ローマにあるアイルランド神学校 (the Irish College in Rome) で神学を学んだ俊才である。少年は、この有能な神父から「ミサの答辞」の暗譜をとおして正しいラテン語の発音を教えてもらった。神父のほうでも少年に特別な目をかけてくれたらしい (これは少年の伯父と Cotter 老人の会話の中にもうかがえる)。また、少年は神父愛用の黒い嗅ぎ煙草入れに中味を詰めることを日常的な務めと思い、それを実行していた。老齢と麻痺のために神父の手が震えたためであろう。

このように、神父と少年の間には一種の《父権制 (patriarchy)》のような社会的関係が成立していたようにも思われる。神父の中に、少年は実の父の姿を求め、外国の言語の習得をとおして少年の能力が引き出され、そこに「成長」もみられた。そこにはまた、教師としての神父の歓びがあり、満足感も感じられた。さらには、日常的な任務ともなっていた「煙草詰め」の仕事は、半ば従僕としての少年の位置付けが確立しかけていた。—— このような両者の関係も曖昧で、理解し難いものである —— 「親しい」神父が死んだ結果、少年には悲哀といった感情はあったのだろうか、読者がここに読み取れるものは、少年の〈自由で爽やかな気分〉とか〈解放感〉という類の感情である。「慈父のような」神父の存在とは少年にとってどのようなものであったのだろうか。この問いかけに対し、Joyce は「見せかけではない」人間関係を形成することの意義を《陰画的な手法》を用いて示唆しているように考えられる。

## V. Flynn 神父と姉妹たち

物語の終わりの場面で、少年は伯母に連れられて Flynn 神父の姉妹たちのところへお悔やみに行く。そこで、神父についての不思議な思いが、少年の心に、静かな納得をもたらす。もう日没後であったが、家々の窓ガラスに、大きな雲の茶色がかった金色が映えていた。死者はもう納棺されている。伯母と神父の妹 Nannie と一緒に、暗い部屋で跪いて、少年は《祈るふり》をするが、老婆の咳くような祈りの声が邪魔になって心を統一することができない。今は亡き老神父は、あの棺に入っても、きっと微笑んでいるだろうとの空想に捕らえられる。しかし少年が棺に近づいて中を見ると、神父は笑ってはいない。

(7) There he lay, solemn and copious, vested as for the altar, his large hands loosely retaining a chalice.  
(p. 16)

この物語 “The Sisters” の第一稿では、神父は「ロザリオ」を手を持っていたが、第二稿では「十字架」に変更され、さらに第三稿 (本稿) では「聖杯」に改訂されたという。「聖杯」には、神父の《神の恵みを人びとに分け与えるという聖職者の権能と役割》が象徴的に凝縮されている。作者 Joyce の「この言葉」の選択と推敲には文学的・宗教的イメージの鮮明化への専念とこだわりが感じられる。しかし、棺に納められた神父は、力なく「聖杯」を持つ仕草をしているだけである。部屋いっぱい漂う強い香りが少年の意識と感覚を圧倒する。それは死者の葬儀のために飾ってある「花」から匂ってくる香りである。

三人は十字を切って棺の置かれた部屋を出る。階下の小部屋に行くと、神父の使っていた杖掛椅子に妹の Eliza が腰掛けている。Nannie がシェリーとクラッカーを勧める。ここでは、本

来ミサ聖祭で用いられるべき聖なるものが、日常的な物品の姿で登場する。日常性という世俗化された慣習の中で《神聖なるもの本質》が見失われ、《神の実存の現実感》も希薄になるという思いが提示されていると考えることができる。Flynn神父は脳卒中の発作を起こして逝き、もはや聖体を人びとに配ることはできない。それを象徴的に表すかのように、《空の聖杯》が棺の中の神父の手に力なく持たせられているだけである。

Elizaの話をとおして、神父が徐々に衰弱して天に召されていったことが伝えられる。さらに彼女の話は、神父の（晩年の）様子が普通でなかったことに触れ「神父の務めが過重であったのですよ。それで一生を台無しにしてしまったようなものですよ」という言葉に辿り着く。少年の伯母は「神父様は失意の方だったようですよね」と応える。しばらく間を置いてからElizaがゆっくりした調子で言う。

- (8) “It was that chalice he broke… That was the beginning of it. Of course, they say it was all right, that it contained nothing, I mean. But still… They say it was the boy’s fault. But poor James was so nervous, God be merciful to him !” (p. 20)

運に恵まれなかった兄James (Flynn神父) に対して、口先では“poor James”を連発するものの、Elizaは心底から同情しているようでもない。兄が死に至った経緯についても、自分たちの理解を超えたことにして距離を置いている。ElizaとNanneの姉妹たちは、親しい関わりを持って生きてきた（つमりの）兄との間に、ほとんど無意識のうちに「無関心」という閉鎖的世界を作ってしまったように思われる。この姉妹は、自分の《無知》について、あまり気にもせず日常生活を続けている。これは明らかにダブリンの人びとの姿を反映していると言えるだろう。このような《無知》の姿こそJoyceの言う“paralysis”の様相であり、当時のダブリンの人びとの病める特徴でもある。

姉妹たちの《無知》の様相が暗示される箇所（言語表現）は作品の中にもいくつか示されているが、以下に特徴的な例を引用してみたいと思う。（いずれもElizaの「語り」の中に示されるものである）

- (9) My aunt waited until Eliza sighed and then said:  
 ‘Ah, well, he’s gone to a better world.’  
 Eliza sighed again and bowed her head in assent.  
 My aunt fingered the stem of her wine-glass before sipping a little.  
 ‘Did he … peacefully?’ she asked. ‘Oh, quite peacefully, ma’am,’ said Eliza. ‘You couldn’t tell when the breath went out of him. He had a beautiful death. God be praised.’  
 (下線筆者) (pp. 16-17)

- (10) ‘That’s what the woman we had in to wash him said. She said he just looked as if he was asleep, he looked that peaceful and resigned. No one would think he’d make such a beautiful corpse.’  
 ‘Yes, indeed,’ said my aunt. (下線筆者) (p. 17)

- (11) ‘Only for Father O’Rourke I don’t know what we’d have done at all. It was him brought us all



them Flowers and them two candlesticks out of the chapel and wrote out the notice for the Freeman's General and took charge of all the papers for the cemetery and poor James's insurance.' (p. 18)

引用文(9)の 'a beautiful death' は、おそらく「立派な死」とか「きれいな死に顔」というような意味であろうが、この類の表現をむやみに用いるのは《無学な人たち》の特徴と言えるだろう。(10)の 'beautiful corpse' も同様である。(11)の 'It was him brought us all them flowers and them two candlesticks' は、正しい統語法の観点からすれば、'It was him that brought us ...' とするのが品位ある語法であろう<sup>8</sup>。また、Freeman's Generalは明らかにFreeman's Journalの言い間違いであると考えられる。これもやはり、教養の無さから来る不用意な表現、あるいは粗忽な人柄からくる品位の無い言語表現と理解することができる。

ところで、本短篇“The Sisters”のタイトルを象徴する独身の初老の姉妹たちElizaとNannieの仕事は何であったのだろうか。この問いに答える手掛かりを本文中に見出すのは困難である。物語の主要な登場人物の労働の内容についての言及はおろか、暗示すらなされていないからである。(Dublinersに編まれている最終の物語“The Dead”に登場する姉妹たちJuliaとKate Morkanについても同じことが言える。) Henke他の指摘によれば、当時のダブリンの女性にとって、〈経済的な側面〉および〈芸術的な側面〉の両面において最も主要な仕事は「小売業従事者(店員も含む)」か「音楽教師」のどちらかであった<sup>9</sup>。ここで言えるのは、この姉妹たちは当時のダブリンで生活を営む女性にとって主要かつ標準的と思われていた類の仕事には従事していないということである。若い時分、兄Jamesのローマへの留学や、その後の彼の栄達を支えた姉妹たちが担った経済的な負担も困窮の要因となったとも推測できる。あるいは、生来の素性、能力、教養、財力、容貌そして属していた社会的階層の「低さ」などが複合して「当時の標準的な仕事」から彼らを引き離すことになったのであろうか。

Joyceがこのようなことにわざわざ触れないところ(曖昧さ)に却って本短篇の文学的な奥行きと余韻が加味されているようにも感じられる

## VI. おわりに — 「生者」と「死者」のはざまを読み取る《普遍的リアリズム》の観点 —

Dublinersにかぎらず、概ねJames Joyceの作品は、現代文明の諸相を提示しながら人間共通の醜悪さをイメージ化したものであり、それと同時にJoyce個人の苦痛、欲望、不安、思案などのイメージ化でもある。言い換えるならばJoyceは個人の問題を人類全体の不安、痛み、悪のあらわれとして普遍化したのである。

短篇“The Sisters”の作品としての構成自体もさることながら、内容そのものの持つ最も顕著な特性・特徴は〈曖昧性(ambiguity)〉と〈不確実性(uncertainty)〉にある。このような一見頼りがたい特性は、Joyce特有の修辭的技法や文体による絶妙な相乗効果も得て、独自の文学世界を構築することになる。

ところで、「生者」と「死者」のはざまで交わされる「語り」とはいかなる“narrative”なのだろうか。強いて言うならば、Joyceの言う「語り」とは、おおよそすべての人間の内なる《荒廃状態の原風景》とも言うべきものである。ここでは「生者」も「死者」もともに〈語る〉のである。語ることによって《原風景》を描き出し構築するのである。登場人物たちの高尚な

道徳的な理想を追い求める姿とか、懸命に苦難に耐えながら不条理と闘う態度などは、その様子・過程の一瞬一瞬が「語り」そのものであると言ってもいいだろう。つまり、これらの姿勢とか態度などは、私たち読者が〈対象〉から客観的に一定の距離を置いて読んでみたり、〈悲愴〉の対極から目をそらして〈滑稽〉の見地に立ったりして眺めたりすれば、Joyceの本の奥行きと真価が一層新たな輝き見せはじめるものと考えられることができるだろう。本短篇に漂う〈普遍化された悲愴感〉は、〈普遍化された滑稽の感情（覚）〉の裏返しとしてみるのできるのである。〈曖昧性〉や〈不確実性〉に包含された「語り」であるからこそ、読者の視点に縦横無尽に交叉し得るのである。こうして読者はそれぞれの心象風景を確かな内在的証拠として焼き付けながらJoyceの文学世界を愉しむのである。

短編“The Sisters”を読むとき、“paralysis”をはじめ“gnomon”、“simony”といったキーワードを手掛かりとしながら「曖昧性」「不確実性」という障害物を乗り越えなければならない。どのキーワードも本短篇のモチーフを構築する重要な「鍵」となる用語であって、いずれも「無気力」「麻痺」「失敗」「挫折」「孤独」「俗悪」「過失」などの、どちらかと言えば、否定的、消極的なイメージを与えるものばかりである。

しかし、私たち読者・研究者にとって肝要なことは、これらの「暗さ」ばかりが強調されているとも思われるJoyceの文学世界を「普遍的リアリズム」という観点で「読む」ことであろう。そうすることによって、私たちは全ての人間に共通する普遍的特質に触れ、相互に共鳴し、他者を受容してゆくことができるのではなからうか。Joyceの文学世界の狙いは、ダブリンという小都市に起こった出来事が世界中の人びとに「人間の弱さの認識」「人間らしく生きる力」そして「希望」を付与することに在ると確信したい。

#### [付記]

- TextはJames Joyce, *Dubliners* (London : Grant Richards Ltd. Publishers, 1914) を使用した。

#### 註

- 1 Richard Ellmann ed., *Letters of James Joyce, Volume II* (New York: Viking Press 1966) p. 99.
- 2 *The Irish Homestead*, ed., 1904.
- 3 Phillip Herring, “Structure and Meaning in Joyce’s “The Sisters,” Harold Bloom, ed., *James Joyce’s Dubliners* (New York: Chelsea House Publishers, 1988) p. 42.
- 4 “Gnomon”: A pillar, rod, or other object which serves to indicate the time of day casting its shadow upon a marked surface. (*OED*)
- 5 Mary T. Reynolds, *James Joyce: A Collection of Critical Essays* (Prentice Hall · Englewood Cliff · New Jersey: A Simon & Schuster Company, 1998) p. 68.
- 6 Eric Bulson, *The Cambridge Introduction to James Joyce* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006) p. 38.
- 7 John William Corrington, “The Sisters,” Clive Hart ed., *James Joyce’s Dubliners* (New York : The Viking Press, Inc., 1969) p. 19.
- 8 Katie Wales, *The Language of James Joyce* (London: Macmillan Education Ltd., 1992) p. 17.
- 9 Suzette Henke and Elaine Unkeless ed., *Women in Joyce* (Urbana, Chicago · London : University of Illinois Press, 1982) p. 48.